

## 鳥取市西桂見墳丘墓出土土器について

岸 本 浩 忠\*

Earthenware from Nishikatsurami Yayoi mound burial  
in Tottori-shi

by

Hirotada KISHIMOTO

## はじめに

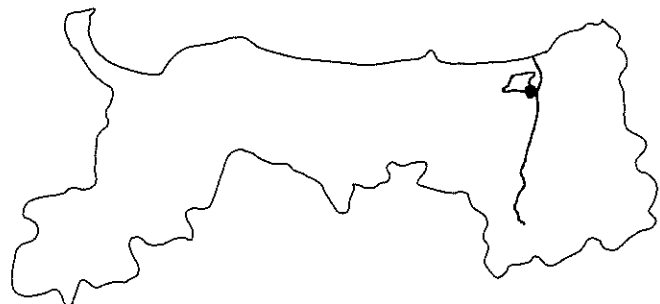
鳥取市西桂見墳丘墓は、鳥取市の西部、湖山池の南東岸の標高約40mの丘陵上に築かれた弥生時代後期中葉～後葉の墳丘墓である。

この墳丘墓は半分を土取りで壊された形で1981年に発見され、発掘調査を経て消滅した。<sup>(1)</sup> 破壊のため、四隅突出型墳丘墓あるいは長方形を呈する墳丘墓なのか断定は難しい。前者の立場をとるとしたら、突出部をいれて60m以上もある日本最大の四隅突出型墳丘墓である。

供献されていたと考えられる土器は1971年頃、若林久雄氏らにより墳丘の西側麓で採取され、1983年に県立博物館へ寄贈された。<sup>(2)</sup>

2000年の当館特別展を期にこれらの土器のうち、5点を復元した。(特殊脚付壺A～特殊脚付壺D・大型器台) これら5点は、松井潔氏の研究で北陸地方の土器と親縁性を持つことが指摘された。<sup>(3)</sup> また、西桂見墳丘墓が造られた時期は、出雲の西谷3号墓、吉備の楯築墳丘墓、丹後の大風呂南1号墓など、各地の墳丘墓が巨大化した時期であり、先の特殊な土器との関連性も想定される。

本稿では、西桂見墳丘墓出土土器を報告し、それらの時期差と北陸系といわれる特殊脚付壺の地域性を考察することを通して、今は消滅してしまった西桂見墳丘墓の遺跡像の復元を試みる。



挿図1. 西桂見墳丘墓の位置

\*鳥取県立博物館学芸員 Tottori Prefectural Museum.

1. 土器の概要 (挿図2～7、挿表4～10、図版1～3)

当館の所蔵する資料は、完形品(復元)5点及び、大破片数点、小破片が蜜柑箱2杯程度である。本稿では、1981年に若林氏らによって発表された主な土器14点、及びこれまで未報告だった資料を報告する。

今回報告する土器は、復元した5点を含む45点である。(これらはすべて図面・観察表に掲載した。また、特殊脚付壺を中心に写真図版に掲載した。)

器種別には、壺2点、特殊脚付壺11点、甕5点、器台20点、高坏3点、器種不明なもの4点である。

西桂見墳丘墓の土器は、松井編年Ⅵ期からⅧ期にまたがる。

特殊脚付壺・大型器台：松井Ⅵ期 口縁部、脚端部の平行沈線が疎で、ナデ消さない。

壺? (底部)：松井Ⅷ期 尖底化し自立不可能となる前の段階の十円玉状の底部(21)(22)。

甕：Ⅵ期は口縁外面の平行沈線が疎の(18)、Ⅶ期は平行沈線が多条化した(15)(17)である。

器台・鼓形器台：Ⅵ期は筒部が長く、口縁・脚端部が広くない(31)、平行沈線が疎な(30)(32)(34)(35)(37)(41)、Ⅶ期は平行沈線が多条化した(38)(42)(43)、Ⅷ期は口縁部、脚端部が広い(27)(29)(39)(40)や、平行沈線をナデ消す(33)が見られる。

高坏：(23)は脚端部が僅かに面を持つ器形から、松井Ⅷ期と考えられる。

周辺の遺跡では、岩吉遺跡・秋里遺跡等で同時期(松井Ⅵ～Ⅷ期)の土器が見つまっている。

(挿表1及び次頁「時期区分の指標」、個別の時期は挿表4～10参照)

挿表1. 各地の時期の併行関係 (山陰・丹後・畿内・北陸)

		因 幡			丹 後		北 陸		畿 内	主 な 遺 跡
		松 井	清 水 (1992)	清 水 (1994)	野々口	谷 本	桶			
弥 生 時 代 後 期	前葉	松井Ⅴ期	V-1		後期Ⅰ	V-1	2	1	河内V-0	左坂・三坂神社 江上A  法仏 西念・南新保 西桂見墳丘墓 布目沢北 大山墳墓群 水無月山、西念・南新保、鉢伏茶白山 大風呂南 法仏 古殿 西谷1号墓 西念・南新保 富崎1号墓
	中葉	松井Ⅵ期	V-2		後期Ⅱ	V-2	猫	2	河内V-2	
							橋	4		
	後葉	松井Ⅶ期	V-2		後期Ⅲ	V-3	法	2	河内V-3	
							仏	3		
	終 末	松井Ⅷ期	Ⅷ-1	庄内1	後期Ⅳ	V-4	4	1	河内Ⅷ-1	
							月	2		
		松井Ⅸ期	Ⅷ-2	庄内2	併行Ⅰ (古)	影	3	桶向2式		
						4	1			

【金沢市西念・南新保遺跡Ⅳ】金沢市教育委員会(1996)などをもとに、作製した。(5)(6)  
(清水(1994)では、清水(1992)のV-3、Ⅷ-1、Ⅷ-2がそれぞれ、庄内1、庄内2、庄内3・庄内4。)

### 時期区分の指標（松井前掲（3）より）

- 松井Ⅴ （壺・甕）内面ヘラケズリが頸部まで達する。口縁、端部を断面三角形に肥厚させてやや上下につまみ出すか、断面T字状に拡張して幅の狭い口縁帯になる。口縁外面には2～3状の凹線か、断面凹状の平行沈線を施紋することが多い。
- 松井Ⅵ （壺・甕）直立またはやや外傾する複合口縁が成立。口縁外面には3～5条程度の断面凹状の平行沈線。  
鼓形器台の祖形が出現。
- 松井Ⅶ （壺・甕）複合口縁が最大限立ち上がり、丁寧な平行線を施紋したもの。外傾し下端部がわずかに下垂する幅広のもの。外面には多条平行沈線。  
（鼓形器台）口縁部の拡張。
- 松井Ⅷ・Ⅸ（壺・甕）口縁の平行線を手抜きしたり、省略したり、ナデ消した時期のもの。複合口縁が外反、口縁下端部の下垂が甘くなる。胴部最大径が中位にやや下がる、胴部と底部の稜も甘くなる。  
（鼓形器台）口縁の拡張・外反が顕著。脚台部の拡張が進行。
- 松井Ⅹ（壺・甕）複合口縁外面の多条平行沈線をナデ消すものに加えて、横ナデのみのもの出現。口縁部下端の下垂は外側への甘い稜にかわる。胴部最大径が胴上位2/3ほどに上昇。底部自立不可能なほど狭小・尖底化。

特殊脚付壺は、それぞれ特殊脚付壺A・特殊脚付壺B・特殊脚付壺C・特殊脚付壺Dと呼ぶことにする。

## 2. 主要な土器（図版1、挿図2～5・7・8、挿表4・5・8・11）

ここでは、特殊な土器4点と大型器台について、その概要を述べる。

### ①器形：ア）特殊脚付壺A・特殊脚付壺D

特殊脚付壺Aを縮小、簡略化したものが特殊脚付壺Dと考え、同一の器形とした。

長い頸部にソロバン玉状の胴部が続き、ハ字状に広がる脚が付く形状をとる。松井氏が述べているとおり、富山県大門町布目沢北遺跡出土例などに、プロポーションが似ている。<sup>(7)</sup>

### イ）特殊脚付壺B

有段口縁で胴部はソロバン玉状の壺が、有段口縁・大きく広がる脚をもつ器台に乗った形をとる。壺部・器台部はつながっている。器台の脚は有段脚である。清水眞一氏は、器台の上に壺を乗せた点に注目し、装飾器台（京都府峰山町古殿遺跡出土例など）との類似性を指摘している。<sup>(8)</sup>

ウ) 特殊脚付壺C

フラスコ状の壺に台が付く。脚はハ字状に広がる脚である。松井氏の研究のとおり、金沢市西念・南新保遺跡出土例、石川県宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡出土例と酷似している。<sup>9)</sup>特に、西念南新保遺跡出土例はプロポーション・後述する調整（胴部内面のハケ目）とも一致点が多い。

エ) 大型器台

口縁は大きく広がり幅をもつ。太い筒部から裾部へ続く。脚も幅をもち複合脚的である。口縁外面に平行沈線を施し太い筒部に円形の孔を持つ点は、富山県上市町江上A遺跡出土例に瓜二つである。

なお、この器台に対応するような壺は、今のところ当墳丘墓では見つかっていない。

②調整：風化しているものもあるが、多くは頸部～脚部外面はミガキ、頸部～胴部内面はハケ目、脚部にケズリが見られた。

ア) 竹管文

西桂見墳丘墓の特殊な土器に特徴的に見られる調整に竹管文がある。大きさ、施された部位別にまとめると挿表2の通りになる。

径8mmの二重竹管文は4つの土器すべてで見られる。この竹管文をベースにして、大型の特殊脚付壺Aには、さらに径の大きい二重のもの・径の小さな一重のものを加えた。同一の竹管文が使用されており、色調・胎土も似通っていることから、これらの特殊な土器はほぼ同時に作られたと考えられる。

挿表2. 西桂見墳丘墓 特殊脚付壺A～特殊脚付壺Cにおける竹管文一覧

形態	径	土器	列	部位	形態	径	土器	列	部位
二重	10	特殊脚付壺A		口縁部円形浮文上	二重	8	特殊脚付壺B	2列	口縁部内外面
二重	10	特殊脚付壺A	2列	頸部内外面	二重	8	特殊脚付壺B	2列	胴部最上部外面
二重	8	特殊脚付壺A	2列	頸部外面	二重	8	特殊脚付壺B	1列	胴部最大径貼付凸帯の上
一重	6	特殊脚付壺A	1列	頸部外面口縁部直下	二重	8	特殊脚付壺B	1列	胴部最大径貼付凸帯側面
二重	8	特殊脚付壺A	1列	頸部最下部外面	二重	8	特殊脚付壺C	2列	頸部貼付凸帯の下
二重	10	特殊脚付壺A	1列	胴部最上部貼付凸帯の上	二重	8	特殊脚付壺C	2列	胴部貼付凸帯の上
二重	10	特殊脚付壺A	1列	胴部最上部貼付凸帯側面	二重	8	特殊脚付壺C	1列	頸部・胴部貼付凸帯側面
二重	10	特殊脚付壺A	2列	胴部最大径貼付凸帯の上	二重	8	特殊脚付壺C	1列	胴部貼付凸帯の下
二重	10	特殊脚付壺A	1列	胴部最大径貼付凸帯側面	径の単位はmm				
二重	10	特殊脚付壺A	2列	胴部最大径貼付凸帯の下					

イ) 円形浮文

径2.4mmの円形浮文が、特殊脚付壺Aの口縁外面に見られる。円形浮文中には、径10mmの二重の竹管文が施されていた。

ウ) 刺突文

特殊脚付壺Aの口縁外面に見られる。長径9mm短径7mmのものが、平行沈線上に5個施されている。

#### エ) 貼付凸帯

胴部最大径、頸部付け根を飾る。特殊脚付壺A～D以外の破片を観察すると、土器本体から剥離しているものが多く、本体とは別に作られ焼成前に貼り付けられたことが窺われる。詳細は以下の通りである。

頸部：特殊脚付壺C（幅16mm 断面四辺形）

頸部付け根・胴部最上部：特殊脚付壺A（幅19mm 断面三角形）・特殊脚付壺B（幅17mm 断面三角形）・特殊脚付壺D（幅13mm 断面三角形）

胴部最大径：特殊脚付壺A（幅22mm 断面四辺形）・特殊脚付壺B（幅16mm 断面四辺形）・特殊脚付壺C（幅17mm 断面四辺形）

#### オ) 平行沈線

平行沈線が見られる。

口縁：特殊脚付壺A（5条）・特殊脚付壺D（4条）・大型器台（4条 復元）

底部：特殊脚付壺A（6条）・特殊脚付壺C（3条）・特殊脚付壺D（4条）・大型器台（4条）

③色調：すべて明黄橙褐色を呈する。特殊脚付壺Bの竹管文内に赤色顔料が残っていたことから、この土器は赤彩されていたと考えられる。

④胎土：5つとも、石英・長石・黒雲母を含み、密である。

⑤焼成：5つとも良好である。

特筆すべきこととしては、以下の点が挙げられる。

#### ①装飾性と法量及び仮器化

特殊脚付壺A（口縁に平行沈線、列点文、円形浮文及び内外面の二重の竹管文、胴部上端、最大径に貼付凸帯と二重の竹管文をもち、約80cmもの高さをもつ）に代表される特殊な土器（未復元の破片も含む）は、装飾を尽くし法量も大きい。（小型の部類と思われる特殊脚付壺Dでさえ約50cmもの器高をもつ。）その上、確認できるすべての特殊脚付壺には、焼成前より胴部の底に孔が開けられており、仮器化されている。

#### ②因幡、西桂見墳丘墓の特殊性

①の特殊な土器は、松井潔氏の述べるとおりのプロポーシオンは北陸のものと酷似している。しかしながら、竹管文を施す点・①で述べた異常なまでの装飾性とその様式（3つの円形浮文を平行沈線上にもつ特殊壺口縁、山陰特有の平行沈線を施した複合脚のように幅をもつ脚、竹管文で飾られた器台裾部、赤色顔料が付着した特殊脚付壺胴部）・仮器化がなされている点・大きな法量・色

調・胎土は、北陸のものとは一定の差異があると考えられる。

すなわち、北陸のものには西桂見墳丘墓出土土器のような竹管文は見られない。せいぜい、一重竹管文や同心円状S字文ぐらいである。また、法量も30cm程度で、胎土も異なる。(因幡で西桂見墳丘墓と同時期に営まれた鳥取市門上谷<sup>もんじょうだに</sup>1号墓でも、松井氏の指摘通り富山県上市町江上A遺跡<sup>かみいち えがみ</sup>出土例にプロポーション等が酷似した台付壺が出土した。胴部最大径を棒状浮文で装飾する点・仮器化がなされていない点は北陸のものに似通っているが、脚端部が幅をもつ点・色調に彼の地のものとの違いがある。)

### ③時期差

①で述べた特殊な土器は、一時期(松井Ⅵ期)にとどまる。

しかしながら、西桂見墳丘墓出土の他の甕、器台等の土器は1で述べたとおり松井Ⅵ期からⅧ期にまたがる。

## 3. 考察

### (1) 時期

西桂見墳丘墓の特殊な土器と、北陸型台付装飾壺などの時期関係は挿表3の通りになる。

西桂見墳丘墓の特殊脚付壺が作られたのは松井Ⅵ期(法仏古併行、弥生時代後期中葉)である。このころ北陸では、西念・南新保遺跡などで、北陸型台付装飾壺の祖形となるものが出現し始めた<sup>(10)</sup>。

一方、丹後では、後期Ⅱ期古(松井Ⅵ期併行)に、京都府弥栄町左坂15号墓などでワイングラス形の台付壺が出現し始める。<sup>(11)</sup>

また、西桂見墳丘墓出土大型器台に類似した江上A遺跡出土例などは、江上A編年後期Ⅰ期、西念・南新保編年猫橋式(弥生時代後期前葉)まで遡る。<sup>(12)</sup>

### (2) 地域的特色

台付装飾壺の出土例は圧倒的に北陸(越中・北加賀)が多い。<sup>(13)</sup>ただし、これらの土器は「月影期」の遺跡ではかなり普遍的にみられ、西桂見墳丘墓で特殊な祭祀が行われた時期よりも遅れる。

一方、丹後では後期Ⅳ期(松井Ⅷ・Ⅸ期)まで、墳墓にワイングラス状の台付壺を供献している。

これに対して、因幡では、北陸の影響を受けた台付装飾壺の出土は西桂見墳丘墓の時期のみである。

### (3) 胎土・色調

西桂見墳丘墓のものは明黄橙褐色を呈するのに対して、北陸のもの多くは淡黄灰褐色を呈する。胎土に限って言及するならば、丹後の左坂15号墓や大山墳墓出土ものの方が近い。化学分析なしで言及するのは、時期尚早の感もあるが、北陸からの搬入と考えるよりも、因幡での製作と考えた方が説明が付きやすい。

### (4) 法量

挿表 3

	松井編年	西桂見墳丘墓	丹後の台付壺	北陸の装飾台付壺・器台	北陸型台付装飾壺
	V期以前			江上A遺跡	↓ (成立) ↓
後期中葉	Ⅵ期	大型器台 特殊脚付壺 甕・鼓形器台	左坂15号墓第6主体  大山8号墓第2主体	西念・南新保遺跡	
	Ⅶ期	甕・鼓形器台		鉢伏茶臼山遺跡	
後期後葉	Ⅷ期	壺? 鼓形器台・高坏	西谷1号墓		
	Ⅸ期		古殿遺跡 SX11		
後期終末	X期				

西桂見墳丘墓のものは大型品（特殊脚付壺Aの器高約80cm）が多いのに対して、北陸・丹後のものの多くは小・中型品（器高約20～30cm内外）である。

### (5) 仮器化

西桂見墳丘墓の特殊壺は焼成前から壺の底に孔があるのに対して、北陸・丹後のものには孔がない。西桂見墳丘墓の特殊脚付壺は最初から墓に供える目的で作られた仮器と言える。

### (6) 装飾

西桂見墳丘墓の特殊脚付壺の装飾は、竹管文と胴部最大径などにおける貼付凸帯が基本となる。これに対して北陸型台付装飾壺は、胴部最大径に平行沈線を施しその上に棒状浮文を付ける。丹後のものは、表面にミガキを施すぐらいでさしたる装飾は見られない。

(1)～(6)から、以下のように考えてはどうだろうか。

弥生時代後期中葉頃（松井Ⅵ期からⅦ期にかけて）山陰東部（因幡）から北陸への土器の流入が見られるなど両者の交流が活性化した。（金沢平野北部の拠点集落、西念・南新保遺跡では、岩吉遺跡出土台付壺の影響を受けた土器や青谷上寺地遺跡出土木製高坏に酷似したものが出土。）

因幡と加賀・越中の交流の中で、北陸型装飾台付壺の原形である金沢市西念南新保遺跡出土例などを模倣した、特殊脚付壺A～Dをはじめとする土器が因幡で作られ、西桂見墳丘墓に供献された。

これらの特殊土器は北陸の器形を持ちながらも竹管文を駆使し因幡の様式も加わったものである。

松井Ⅶ～Ⅷ期には、因幡では西桂見墳丘墓出土例のような特殊な土器は、見られなくなり、同墳丘墓でも甕や鼓形器台を用いた祭祀を行った。

一方、北陸型装飾台付壺は加賀・越中などで定型化し、弥生時代後期終末（月影期）にかけて集落遺跡などで普遍的に見られるようになった。これらは、主に集落内での祭祀に用いられたので、西桂見墳丘墓出土例のように大型化する必要はなかった。

## おわりに

今回は、西桂見墳丘墓の土器について、①～③の結論を得た。

### ①装飾性と法量及び仮器化

西桂見墳丘墓の特殊脚付壺Aをはじめとする土器は、口縁から底部に至るまで、時には内面までも、竹管文などを駆使して装飾した、法量も最大の物で約80cmに達する堂々としたものである。これらは、焼成前から穿孔された仮器である。

### ②地域性

因幡で作られた土器である。北陸のプロポーシオンに竹管文など因幡の装飾を加えた。松井Ⅶ期以降、因幡で広まることはなかった。

### ③時期

西桂見墳丘墓で採取された土器は松井Ⅵ期～Ⅷ期（弥生時代後期中葉～後葉）にまたがる。赤彩された鼓形器台などが出土したことから、松井Ⅷ期まで祭祀が行われたと考えられる。

西桂見墳丘墓の土器から、遺跡像を推察すると、以下のようになる。

### ①北陸との交流

供献された特殊土器が北陸のプロポーシオンをもつこと及び、近隣の岩吉遺跡出土の台付壺の影響を受けた土器が、金沢市西念・南新保遺跡で出土したことは、西桂見墳丘墓が築かれた時期には、彼の地との人の行き来があり、当墳丘墓の初期の被葬者は北陸地方との関係を持った人物だった可能性があると思われる。

### ②墳丘墓の継続期間

築造されたと思われるⅥ期の特殊な土器及び、Ⅶ・Ⅷ期の鼓形器台・高環が出土したことから、1時期のみの遺跡ではなく、松井ⅥからⅧ期まで祭祀が続けられた墳丘墓である。

## 付記

①土器図面 ア) すべて縮尺4分の1で掲載した。

イ) 西桂見墳丘墓出土のものについては岸本が実測した。壺の内部等実測不能な部分については、若林他 前掲(2)を参考に補足し、破線で表現した。



ウ) 特殊脚付壺A～D、大型器台は、松井潔氏の監修で岸本が作製した復元案である。

エ) 比較のため参考に掲載した布目沢北遺跡、西念・南新保遺跡、江上A遺跡出土のものは報告書より転載した。<sup>(14)</sup>

- ②土器観察表 ア) 西桂見墳丘墓出土のもの、布目沢北遺跡出土のもの(50)、鉢伏茶臼山遺跡出土のもの(51)、西念・南新保遺跡出土のもの(52)、江上A遺跡出土のもの(54)については、岸本が観察した。
- イ) 西念・南新保遺跡出土のもの(53)は、報告書の記載内容を転載した。
- ウ) 備考欄には時期を記入した。時期の判断は、松井編年に基づき岸本が行った。西桂見墳丘墓出土土器で若林他 前掲(2)で掲載されているものについては、その番号を記入した。

## 註

- (1) 『西桂見遺跡』鳥取市教育委員会(1981)  
平川 誠「西桂見遺跡」『えとのす』18 新日本教育図書(1982)
- (2) 若林久雄 他「鳥取市西桂見出土の特殊土器について」古代学研究会例会資料 日本海文化を考える会 (1981)
- (3) 松井 潔「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態—」『古代吉備』第19集 (1997)
- (4) 前掲 (3)。松井氏の類型でいうなら、部分要素 (器形) のみの外来と考えたい。
- (5) 『四隅突出型墳丘墓とその時代』第25回山陰考古学研究集会資料(1997)
- (6) 野島 永・野々口陽子「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓 (二)」『京都府埋蔵文化財 情報』第76号 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター(2000)
- (7) 前掲 (3)
- (8) 清水眞一「因幡・伯耆地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年山陽・山陰編』木耳社(1992)
- (9) 前掲 (3)
- (10) 宮本哲郎「台付裝飾壺の系譜—北加賀の資料を中心とした基礎的考察—」『石川考古学研究会々誌』第29号(1986)
- (11) 野島 他 前掲 (6)
- (12) 『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編—』富山県上市町教育委員会(1982)
- (13) 北陸型台付裝飾壺は法仏期 (弥生時代後期中葉頃) の西念・南新保遺跡出土例を祖形として、成立した。次の月影期 (弥生時代終末) に北陸に分布する。胴部の裝飾は、器台と長頸壺が結びついた時の名残で器台受部の口端部が変化したものと考えられる。凸帯は、月影期になると痕跡さえもなくなるが、逆に裝飾として強く意識されるようになる。器形では、胴部を裝飾するかしないかで、2タイプに分かれる。(宮本 前掲(10)) 主に集落遺跡の住居跡などで出土する。
- (14) 前掲 (12) 及び  
『布目沢北遺跡発掘調査概要』富山県大門町教育委員会(1990)  
『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡発掘調査報告書』石川県立埋蔵文化財センター(1980)  
『金沢市西念・南新保遺跡』金沢市教育委員会(1983)